



Challenge Zero



環境性能と国内最大級・最新鋭の機能を 両立する「三鷹データセンター E A S T」

(株) N T T データ

デジタル化が進む世界経済では、膨大なデータ処理を必要とする人工知能(AI)やあらゆるモノがネットにつながる「IoT」の普及などデータの活用が不可欠になっており、データの保存や計算業務を担うデータセンターの重要性が増すにつれて新設需要が拡大し、エネルギー消費量も増えている。今回は、デジタルトランスフォーメーション(DX)の根幹である基幹系システムを支えるN T Tデータの最新鋭のデータセンターの取り組みを紹介する。

お客さまと共に未来の社会を創る

ITの技術革新は目覚ましく、ビジネスモデルの変化も急加速しているこの予測困難な時代において、N T Tデータは自社のみの利益を追求するのではなく、どこまでもお客さまに寄り添い、お客さまの豊富なアイデアと世界中の最先端テクノロジーとを結び付け、ビジネスイノベーションや社会的課題の解決を共に実現していくことでお客さまから長期的に信頼されるパートナーとなることを目指している。

N T Tデータが所有するデータセンターは、社会インフラとなっているシステムや顧客企業のビジネスで欠くことのできないシステムなど非常に幅広いサービスを提供する。しかし、高密度に設置されたIT機器やそのIT機器からの発熱を冷却するために多くのエネルギーが消費され、N T Tデータの排出するCO₂の約70%がデータセンター起因である。N T Tグループは、2030年にデータセンターのカーボンニュートラルを宣言しており、N T Tデータもその達成に向けて、データセンターのエネルギー削減に取り組んでいる。



「N T Tデータ三鷹データセンターE A S T」の外観

自然エネルギーを活用した 最新鋭のデータセンター

2018年4月、N T Tデータは、都内に自然エネルギーを最大限活用し、国内最大級・最新鋭の環境性能を備えた「N T Tデータ三鷹データセンターE A S T」を建設した。

延べ床面積約3万8000㎡(約5600ラック相当)を有する国内有数の規模を誇るデータセンター専用建物であり、自然エネルギーを取り込むための様々な機能を備える。情報機器を効率よく冷やし、熱を排気するため建物構造を一から見直し、免振層は外気冷房のための外気流入口とし、冬季は冷やされた外気により情報機器を冷やし、サーバー排熱を暖房に利用するといった空調システムを建物全体に広げている。

加えて、太陽光発電パネルによる給電などにより年間1万6813kg(2019年度実績)のCO₂を削減しており、2018年9月には、米国グリーンビルディング協会による環境性能評価システム「L E E D」(バージョン4)のデータセンターカテゴリで日本初の「G O L D認証」を取得している。

これまで私たちの暮らしに多くのイノベーションをもたらした情報技術の活用は、気候変動対応においても不可欠である。社会や企業が取り組むDXや気候変動対策の数々も「情報技術でより良い社会を創る」N T Tデータの変わらぬ信念に支えられている。

k

(国内広報部主任研究員 塩入真理)